

ドイツ語圏における家族と離婚の周近的課題

柏木 恭典

The peripheral problem of the family and the divorce in German speaking countries

Yasunori KASHIWAGI

Abstract

This thesis discusses the problem of the family and the divorce in German speaking countries. First lyrics of a German song(G-POP) will be analyzed and interpreted. And, the difference of the understanding of the divorce between in Germany and in Japan is clarified. The latest issue of the family studies in German speaking countries will be continuously clarified. Finally, the problem of the concept of the patchwork-family will be described. A positive meaning of the divorce in German speaking countries will be clarified through this research. In German: Scheidungskind und seine Umgebung in den deutschsprachigen Ländern.

Key-words

family, family-critique, divorce, step-family, patchwork-Family, Scheidungskind

1 はじめに

今や五割を超えとも言われる離婚率を有するドイツ語圏では、「離婚児 (Scheidungskind/離婚家庭の子ども)」という概念が一般に定着している。例えばウィーンのStrozzigasseにある教育学専門の書店のPBV¹の“Familie (家庭)”のコーナーには²、“Missbrauch (虐待)”に関する書物よりも、“Scheidung (離婚)”に関する書物の方が量的にも質的にも圧倒的に多く用意されている。この一例が示唆するように、「離婚児」に関する書物は多く出版されており、ドイツ語圏では、「虐待」という問題とは別の「離婚」という問題が一定の承認を得ているようである³。また、「離婚児」のための絵本や物語も数多く出版されており、親の離婚に伴う子どもの心理的負担の軽減を目的とした書物の存在も多く確認される。また、彼らに対する心理的なワークショップやグループワークも積極的に行われている。ウイ

ーンで10年以上にわたって離婚児のグループワークを行ってきたシュトロバツハ (S.Strohbach) は、「親との死別よりも離婚による別れの方が子どもにとって苦しみ大きい」、と述べている⁴。

こうした親の離婚や再婚とそれに伴う離婚児に関するドイツ語圏の研究動向を踏まえると、様々な疑問が浮かぶ。なぜドイツ語圏においては離婚家庭や離婚児が積極的に語られるのか。なぜドイツ語圏で家族の再構成を核に置く家族論が独自に展開されているのか。なぜドイツ語圏において—通常、ステップファミリーと称される—「パッチワークファミリー」が注目されるのか。そもそもなぜドイツ語圏では離婚や再婚がポジティブに語られるのか。本論文では、こうした問いに答えると共に、ドイツ語圏における離婚研究、家族研究の周辺を明らかにしていきたい。

1 Pädagogischer Buchversandの略。Strozzigasse 14 - 16 1080 Wien 現在は別の名前の書店が入っている。

2 ただし、このお店は2009年夏に閉店してしまった。

3 ドイツ語圏で問題にされる「離婚児」問題は、虐待問題との関連の中で語られることが多いというのが、我が国の現状ではないだろうか。虐待問題は、家庭の問題や夫婦間の問題と重なる部分がありにも大きい。ゆえに、本来「離婚児」に固有な問題であるものが、被虐待児の問題と見なされ、その中で対応されてしまうケースが多い。虐待問題の中に入れ込まれてしまう「離婚」の問題は、個々の虐待の事例の再検討を通じて明らかにしていかなければならない。虐待を受けた子どもと離婚家庭の子どもの同一視は、「離婚児」問題の固有性を見過ごす結果を引き起こすだろう。

4 cf.Susanne Strohbach,Scheidungskinder helfen, 2002. Belz Verlag.

2 離婚家庭の子どもの心理を描く様々なメディア

ドイツでは、家族の危機、夫婦の危機があらゆるところで叫ばれている。例えばドイツ有力新聞、Die Zeit紙の別冊“ZEIT WISSEN”の2009年12月-2010年1月号では、「家族の力-親や兄妹は私たちにどのような影響を与えているのか。そして、どのようにして私たちは自分たち自身の道を見出せばよいのか」という特集が企画され、家族の意味が失われた「今、一体何が正しいのか」(Was stimmt denn nun)」という問いに答えようとしている⁵。ただし、家族の危機、夫婦の危機は決して親の離婚問題に限定されない。結婚をしない若者も増えている。いわゆる「両親 (Eltern)」のいる家庭を見出すことさえ難しい時代になったと言われるほどである。ZEIT WISSENの特集記事の中でも、「家族とは、父、母、子にらず」としており、北アメリカインディアンの女性家族や、ポリガミー (Polygamie) という一夫多妻制・一妻多夫制の家族についても触れている。

夫婦や家庭の危機は、子どもの危機とも直結する。親の一方がいなくなることによって、子どもたちは、たとえどれだけ離婚が一般化されようとも、たとえそれを頭でどれだけ分かっている、深い傷を負うのである。ただし、他の国とドイツが異なっている点がある。それは、社会やメディアがその離婚や未婚を意識的・無意識的に承認し、支援しようとしている点である。

離婚問題や離婚児問題がオープンであるというのは、例えば、親の離婚を歌うポップソングがドイツ語圏で度々繰り返し流行する、という現象からも明らかである。現在ドイツで人気のあるLaFeeという若き女性ボーカル率いるゴシック系ロックバンドも、母親が家を出て行ってしまった心境を切ないメロディーに乗せて歌っている。親の離婚を歌うポップスというのは、日本ではほとんど聴かないが、ドイツではこうした主題の歌が決して少なくない。このLaFeeの大ヒット曲、「Wo bist du (Mama)」の歌詞の一部を見てみよう。

Wo bist du (Mama) / LaFee

Ich fühl mich kalt und leer
私は冷たくて空っぽ

Ich vermisse dich so sehr
ママがととてもとても恋しい
Deine Wärme ist nicht hier
ママのぬくもりはここにはない
Mama du bist nicht mehr bei mir
ママ、あなたはもう私のところにはいない
Warum nur lässt du uns allein
どうしてわたしたちを置きざりにするの?
Papa hat's nicht so gemeint
パパは思ってもなかったみたい
Seine Tränen sind für dich
パパの涙はママのため
Vermisst du uns denn nicht
ママはわたしたちが恋しくないのかな

Mama - Wo bist du jetzt
ママ 今どこにいるの?
Mama - Warum bist du nicht hier Bei mir
ママ どうしてここにいないの? わたしのところに?
Mama wo bist du
ママ どこにいるの?
bitte sag mir gehts dir gut?!
元気にしているの? 教えて!
Es tut so weh hörst mir zu?!
痛いよ わたしの話、聴いてる?
Mama wo bist du
ママ どこにいるの?

Ich kann dich nicht verstehn
わたしはママが理解できない
Warum wolltest du gehn
どうして去ろうと思ったの
Such- jeden Tag nach deiner Hand
毎日ママの手を探してる
Die ich früher immer fand
昔いつも触っていたママの手
Jetzt ist sie weg - lässt mich allein
今ママはいない 出ていった 私を置いて
Nachts hör ich Papa weinen
パパの泣き声を夜は聴いてる
Oh ich hasse dich dafür
ああ、だからママなんて大嫌い
Mama ich liebe dich so sehr
ママ すごく愛してる

Mama - Wo bist du jetzt
ママ 今どこにいるの
Mama - Warum bist du nicht hier
ママ どうしてここにいないの

5 Die Zeit, Zeit Wissen, Nr. 1, Dezember 2009-Januar 2010

Bei mir - Wo bist du jetzt
 私のところに 今どこにいるの？
 Mama - Sag mir warum - Wofür
 ママ どうしてか教えて なんで
 Mama wo bist du
 ママ どこにいるの
 Wo immer du auch bist ich hoff es geht dir gut
 たとどこにいても ママが元気なことを祈ってる
 Es tut so weh bitte hör mir zu
 痛いよ お願い 私の話を聞いて
 Mama wo bist du
 ママ どこにいるの

Bitte sag mir hab ich Schuld daran
 お願い 教えて 決めちゃっていいの
 Dass du mich nicht mehr in deinen Armen halten kannst
 もう私を腕に抱けなくていいって！

Mama - Wo bist du jetzt
 ママ 今どこにいるの
 Mama - Warum bist du nicht hier
 ママ どうしてここにいないの
 Bei mir - Wo bist du jetzt
 私のところに 今どこにいるの
 Mama - Sag mir warum - Wofür
 ママ どうしてか言って なんで
 Mama wo bist du
 ママ どこにいるの
 Wo immer du auch bist ich hoff es geht dir gut
 たとどこにいても ママが元気なことを祈ってる
 Es tut so weh bitte hör mir zu
 痛いよ お願い 私の話を聞いて⁶

ドイツ語圏の離婚家庭の背景を踏まえると、一とりわけドイツ語圏の人間の経験に即して理解することを試みるならば—この歌詞の中で注目すべき点は以下の点である。

第一に、去ったのがパパではなくママであるという点である。日本の離婚家庭の場合、そのほとんどが母子家庭となる。厚生労働省の国民生活基礎調査によれば、日本の父子家庭数（2008）は、推計9万4千であり、約71万いるとされている母子家庭とは比較にならないほどに少ない⁷。逆にドイツ語圏では、母子家庭と父子家庭の数が日本ほどにひらいていない。この詩にあるよう

に、ドイツ語圏では母が子と夫を捨てて去っていく、というケースが多いということが窺えるのである。日本の多くの離婚児たちは、おそらくこの曲を聴いても共感しないだろう。背景となるシチュエーションの根底が日本とドイツ語圏とは違いすぎるのである。

第二に、夜にパパが泣いているという点である。日本人にはなかなか理解しがたいかもしれないが、ドイツ語圏では、母が去り、父が泣く、ということに共感することができる土台があるのである。ドイツ人男性は弱くなったという声を度々聴いたことがある。泣かぬことが美学である日本人男性のように「マッチョイズム（Machoism）」を保持すべきなのか、それとも現代のドイツ語圏の男性のように弱い男性を目指すのか、男性の在り方も度々議論されている。いわゆる「フェミ男」、「草食系男子」という流行語も、ポストフェミニズム以降の世界的な問題と言えなくもない。ただし、近代化が進むにつれて、男性の女性化、女性の男性化は必然的に生じているように思われる。

第三に、ママが嫌いでありながら、愛していると歌う点である。この相反する二つの感情の交錯は、離婚家庭の子どもの心境を絶妙に言い当てている。自分とパパを捨てて家を去った母親を、嫌いと言いつつ、愛していると歌うこの歌に、多くのドイツの若者が共感したとすれば、ドイツの多くの離婚児たちが同じような感情を抱いていると考えてよいだろう。愛するが故に、自分たちを見捨てた母が許せないのであるし、また、がゆえに、さらにいっそう母が恋しく感じるのである。この二律背反する「嫌い」と「愛している」は、離婚児の心理を理解する上で、非常に大きなキーワードとなるだろう。

そして、第四に、「ママ、どこにいるの?」、というフレーズが繰り返されている点である。ドイツ語の“Wo bist du”という呼びかけは、あらゆる日常場面で使用される言葉だが、離婚をモチーフにした楽曲においてこの呼びかけの言葉が実によく使われている。例えば、Echt!というアーティストも“Wo bist du jetzt”という曲を歌っている。この曲も内容的に離婚児の気持ちを代弁しており、ティーンズ音楽芸能雑誌の『Bravo』でEcht!の離婚児紹介コーナーができたほどであった。そんな彼らも“Wo bist du jetzt”、と歌っている。

6 LaFee：本名Christina Klein.1990年生まれ。アッヘン近くのシュトールベルク出身。本作品は、2006年にリリースされた「LaFee」というアルバムに収録されている。ジャンルとしては、POP ROCKと呼ばれたり、DEUTSCHROCKと呼ばれたりしている。

7 引用元：http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa08/1-1.html

これらの点を踏まえると、同じ離婚という現象も、日本とドイツ語圏とではその捉えられ方においてかなりの差異があると考えられるべきであろう。言葉の意味としては同じであったとしても、その中身において、「離婚」と「Scheidung」の間には大きなズレがあるのだ。いや、それ以前に、このようにいわゆる流行歌の中で若い女性シンガーが離婚をモチーフにした歌を歌い、その曲が流行する、ということにドイツ語圏の離婚へのオープンさが見て取れるのだ。

3 ドイツにおける家族への問い—M.オクスの見解に基づいて

前節で離婚にかかわるドイツのヒット曲の歌詞を取り上げ、ドイツ語圏の離婚と子どもの状況を概観した。LaFeeの詩を読むと、多くの日本人は「だから、家族は大切にしなければならない。離婚は悪しきものだ。離婚をしてはならないのだ。子どもがかわいそうだ。今の親は忍耐が足りない」、と結論付けてしまうだろう。だが、ドイツ語圏では決して離婚を悪しきものとは捉えない⁸。離婚に対してドイツ語圏は決して批判的ではないのだ。むしろ、われわれからすれば「よいのだろうか」と思うほどに、離婚を積極的に肯定的に捉えようとしており、また、これまでの家族の在り方を批判的に検証しようとする試みが盛んに行われている。この「離婚の肯定」と「結婚の否定」が、ドイツの家族論・夫婦論の中核にあるように思われるのだ。

このことと関連して、ドイツ語圏では、いわゆる近代家族の象徴と言われる「小家族」、「核家族」の見直しが積極的に行われている。本節は、まさにこの点に着目し、なぜドイツ語圏では、離婚の否定ではなく離婚の肯定なのか、なぜ家族形態そのものを見直そうとするのか、なぜ自ら家族の解体を目指すのか、といった問題について触れてみたい。

従来の家族像を否定し、新たな片親家族やパッチワークファミリーを肯定的に捉えようとする家族心理学者のマティアス・オクス(M.Ochs,2008)⁹は、小家族がキリスト教の「聖家族」のイメージに直結しているこ

とを主張し、歴史的に作られた構成物だと「小家族」を批判的に捉えなおそうとしている。

われわれは皆、究極の家族の理想像を知っている。教会や博物館で、あるいは写真集や新聞やポストカードのイラストなどで知るのである。それが聖家族である。マリアとヨーゼフが、親しく喜びに溢れたまなざしで、幼子イエスを見つめる。イエスは、飼い葉桶の中やマリアの腕の中ですやすやと眠っている。実際に、われわれの多くが母乳を吸い込む画を見ている。周知の通り、ヨーゼフは実の父ではなく養父であり、また頻繁にヨーゼフ抜きでイエスと共にいるマリアの画がイラストされるにもかかわらず、奇妙なことに、この元型的な画は「機能している」のだ。¹⁰

マリア、ヨーゼフ、イエス、それから『「聖なる事情」で生まれた二番目の子ども」¹¹を含めて考えると、それは、「1950年～1960年代の家族像」と驚くほどに酷似している。オックスは、父、母、子二人という核家族が、この聖家族から影響を受けていることを指摘する。このことから、オクスは二つの誤解を示している。

聖家族の影響を受けたわれわれの家族像に関する誤解の一つは、「19世紀の市民的家族を手本とする継承的な理想」である「私有化された夫君—小家族」¹²が、家族の絶対的な原理であるという誤解である。オクスに言わせれば、こうした19世紀型の市民家族は「神の欲する家族の秩序」となって輝いて見える¹³。だが、われわれには、私有化された夫中心の小家族を—その戦後の具体例が「核家族」であるのだが—生きなければならない根拠はどこにもないのだ。だが、多くの人は、こうした聖家族の影響を受けた19世紀型の市民家族こそが理想の家族と思い込んでいる、このことをオクスは強く警告するのである。「啓蒙された自由に考える人間であるわれわれは、当然こうした戯言に惑わされることはない」¹⁴。

もう一つの誤解は、キリストの誕生から今日に至る

8 cf.スザンネ・シュトロバツハ、『離婚家庭の子どもの援助』、2007、同文書院

9 M.OchsとR.Orbanの共著であるが、本論文では代表のオクス一人に統一して表記することにする。

10 Matthias Ochs/Rainer Orban. Familie geht auch anders. 2008.Carl-Auer S.46

11 Ebd.,S.46

12 Ebd.

13 Ebd.

14 Ebd.

までずっと続いてきた「家族形態の虚構の連続性」¹⁵に由来するものである。父と母と子、家族を構成する人間は、それほど自明でもなければ、それほど単一でもないはずなのに、その構成要素に囚われるのはなぜか、という問いをオクスは立てている。「2000年にわたって多くの人間が、一ひょっとすると遠く異国の一組の「異人」に至るまで—母、父、そして見通せる程度の数の子どもで成り立つ家族形態の中に集められて暮らしている」¹⁶というのは、虚構に過ぎない。オクスは、こうした虚構が再生産されてきたことによって、家族像が固定されてきた、と考えている。

とはいえ、西洋の家族史全体を見渡せば、家族像は単に一義的に規定されただけではない。何度も繰り返し、家族像は「様々なルネッサンス」¹⁷を経験している、とオクスは捉えている¹⁸。

オクスも、ドイツにおける家族問題を批判的に乗り越えようとする論者であるが、彼は単にキリスト教とのつながりにおいて家族を考えているわけではない。むしろ彼に言わせれば、小家族の家族像は、むしろ「経済的諸要因」¹⁹によって引き起こされたものなのである。

今日もなお、多くの人々が、キリストの原家族を基本ひな形する私有化された小家族という家族像に「支配されて」いるが、こうした家族の形態は、実際には神の「愛の秩序」とは関係なく、とりわけ経済的要因によって規定される社会の変化の過程の産物なのである。²⁰

オクスにとっては、欧州における家族の混迷を乗り越える上で、この「神の愛の秩序」をわれわれの家族像から切り離すことが必要不可欠であった。家族は、キリスト教で言う「聖家族」とは関係がなく、経済的な要因によっていわば人為的に作られた産物なのだ、と見なすことがどうしても必要だったのだ。

そこで、オクスは、ドイツの過去にさかのぼり、現

代の小家族とは別の家族形態を明らかにしようとする。そして、ドイツには、現代の小家族とは異なる家族形態があった、という事実を明らかにする。

紀元1世紀から10世紀のヨーロッパにおいて、最も広まっていた家族形態は、夫婦関係を締結しない「内縁(Konkubinats)」であった。このことに、まずオクスは注目する。今日もなおヨーロッパにおいては、「婚外子」は非常に多く存在するが、それは現代の偶然的な現象ではなく、もともとヨーロッパの伝統の中にあっただ。ドイツを含む欧州の結婚問題を理解する上でも、この内縁の夫婦関係の伝統はきちんと理解しておきたいところである。

オクスはさらに中世のゲルマン人の家族形態について述べている。

…ゲルマン人には、実際のところ、男性と女性の共同生活には三つの形式があった。それは、後見夫婦(Muntehe)、愛人夫婦(Friedelehe)、妾夫婦(Kebsehe)だ。後見夫婦の場合、新郎・新婦の親族たちの間で夫婦の契約が交わされる—当の新郎新婦のことは無視して。愛人夫婦と妾夫婦は、ほとんど公式化されず、解消することが簡単な生活共同体である。こうした夫婦は、concupinatus(内縁)という言葉で呼ばれることになる(例えば、性的な独占は一義的な基準ではなかった)。そしてこうした夫婦は13世紀に至るまでには、広く知れわたっていた。²¹

この引用文から分かるように、ゲルマン人にとって夫婦関係は一義的なものではなく、男女の間には様々な関係があった。制度化された夫婦関係よりも、「解消可能な男女関係」がゲルマン人にとっては自然なことであったのだ。こうした多様な夫婦関係というのは、ゲルマン人に特有のもので、もともとドイツの風土として多様な夫婦関係という発想は古くからあったと考えてよさそうである。こうした愛人夫婦や妾夫婦は、「聖職者や修道女や修道士らにも快く受け入れられていた」²²。

15 Ebd.

16 Ebd.

17 Ebd.,S47

18 Ebd.

19 Ebd.

20 Ebd.

21 Ebd.

22 Ebd.,S48

が、財源の問題や財産相続の問題もあり、「高位聖職者（大司祭）にとっては、長年の不満だった」²³。それゆえ、高位聖職者たちは聖職者間の愛人夫婦と妾夫婦を禁止したのだ。その後、この禁止は徐々に非聖職者たちにも適用されるようになっていく。つまり中世のキリスト教的な事情により、多様であった夫婦関係が一義的なものになっていったのだ。オクスは、このゲルマン人の夫婦関係の多様さに着目することで、家族が一義的に捉えられないことを強く主張する。その後、「性的に排他的な夫婦関係の締結を確実にするために、教会は13世紀に、夫婦の締結を行う権限を強く要求した」²⁴。このことを逆から言えば、13世紀に教会が夫婦に関与するまでの間、夫婦関係は比較的自由であり、多義性を持ち、様々な形態を持ち得ていた、ということなのである。

さらにオクスは、中世から近代にかけての家族形態の変容に着目する。先述したが、彼は、現存する家族形態が常にその時代の経済的諸要因によって規定されており、その経済的諸要因によって、家族形態はいわば流動的に変化する、という事実を明らかにしようとしている。オクスはまず「農民家族」に注目する。

中世から近代の時代にかけて、農民家庭は最も広くいきわたった家族形態であった。この家族形態の基盤は、簡単に変更可能な形態の後見夫婦だった。夫婦となる人間は、一種の「夫婦契約」を結ぶ。この夫婦の他、子どもたち、他の親族、使用人も農民家族の一員だった。農夫とその妻とその実の子どもから成る「系譜的家族」(genealogische Familie) に対する特定の呼び名は、近代に至るまで存在しなかった。「妻と子と共に」と言った記述で済ますしかなかった²⁵。

農民家族もまた、「変更可能な形態」であったのだ。

夫と妻が生涯を共にするパートナーという考え方はなく、何らかの問題があれば、すぐに解消することができたのである。オクスの言う「農民家族」は、やはり近代の家族像とは異なる別の家族像を描いていると言えるだろう。オクスによれば、この家族形態の特徴は、「子どもや夫婦や女中や作男（召使い）などの死去や様々な理由による退去などによって、家族の構成員がころころと変動する」²⁶、ということだった。こうしたケースでは、次の子を作ったり、新たな農婦を家に連れてきたり、別の使用人を加えたりしており、家族の構成員は実に多様であり、流動的であった。こうした家族の場合、家族を一義的に規定するというのは、ほぼ不可能であり、むしろその「家族の無規定性」こそが、家族の根柢となっていた、と言ってよいほどであろう。ここまで述べれば、オクスや他の論者が、「家族は父、母、子以上のものである」と言っていることの意味が分かってくるだろう²⁷。われわれの先行理解の中に、家族は父と母と子どもから成る、という固定化された考え方がある。「そうでなければならぬ」という価値判断である。こうした価値判断に対して、オクスらは異を唱えているのである。

家族の固定化された考え方は、オクスに言わせれば、「19世紀初頭の工業化の時代」²⁸に生じたものである。この工業化の時代に、労働世界と家庭世界が分離することとなった。すなわち、この時代に伝統的な農民家族が崩壊し、新たな家族形態が登場することになったのだ。まずは、「教養があり裕福な市民階級（高級官僚、企業家、商売人）」²⁹の中で、「私有化された小家族の前身」³⁰が登場することになる。それが「市民家族」である。ここで言う私有化とは、労働世界から切り離され、純化された市民家族の私有化のことである。つまり、変更可能で流動的だった家族という場が完結されたプライベートな空間となったのだ。この小家族の特徴は、まさに「女性と子どもは就業が免除されており、完全

23 Ebd.

24 Ebd.

25 Ebd.

26 Ebd.

27 オクスの言葉をそのまま引用するならば、「Familie ist nicht nur Vater, Mutter, Kind」ということになる(cf.Ebd.S24)。また、別の個所では、「Familie ist mehr als Vater, Mutter, Kind(er)」と述べている(cf.Ebd.S.179)。この両者の違いは、実は大きい。前者が非常に消極的なものに対して、後者は非常に積極的である。

28 Ebd.S.48

29 Ebd.

に新しい性の役割分担が伴っている」³¹ということである。これはまさに近代の家族の大きな特徴であろう。「専業主婦」という言葉が日本語にはあるが、まさに主婦に専業できることが、近代社会の大きな特徴なのだ。

その結果、小家族を生きる女性たちには、二つの重要な役割が与えられたのだ。オクスに言わせれば、それは「子どもの養育 (Die Kindererziehung)」と「男性の情緒的ケア (Die emotionale Versorgung des Mannes)」である。

19世紀以降、小家族の中の女性に与えられた役割の一つは、子どもの養育である。農民家族では、複雑な構成員であった家族全体が子どもの養育を行っていた。家の中にいる複数の大人や兄弟姉妹らが子育てを行っていたのだ。オクスは、心理学的概念である「モデル学習」(Lernen am Modell)³²を用いて、次のように述べる。「『モデル学習』…すなわち、大人がすることを見て学ぶことは、しばしば諸感情の最も高次のものであった」³³。近代の私有化された小家族内では、このモデル学習はほぼ不可能であろう。なぜなら大人たち、とりわけ男性たちは、一次の点とも重なるが「何もしない」からである。ゆえに、オクスの「市民家族における子どもの養育は、さしあたってただ一人女性だけに委ねられた」³⁴という見方は全くもって正しい。その結果、子どもたちは、母親から安全／安心 (Geborgenheit) を得ることとなった。当然のことだが、こうした私有化された家族内における母子関係が、母・子にメリット・デメリットを引き起こした。オクスはこれについては、価値判断を留保している。

次いで、19世紀以後、私有化された小家族を生きる女性に与えられたもう一つの役割は、「男性の情緒的ケア」である。オクスによれば、資本主義の発展こそが、男性間での競争の激化を生み、家庭の外の「競争」という名の戦場で疲れ果てる男性を生み出したのだ。そして、それと同時に、その疲れ果てた戦士である男性をいたわり、ケアする女性の存在も作られたのだ。近代的な市民家族における夫と妻の役割は、まさにこのようにして誕生したと言ってもよいかもしれない。

資本主義的生産様式の登場と共に、男性たちの間で態度は、激化する競争や押し付け合いを通じて変わってしまった。それに伴い、女性たちは、競争で受けた男性の傷に包帯をする役割と責任をもつようになった。女性たちは、男性の厳しい労働世界の対極となって、この役割の下、信頼、保護、親密さ、信用、温かさを提供しなくなってきた。この時代の家族は、聖的な保養施設のステータスへと高められたのだ。公的な生活の中での冷酷な計算や合理性の浸透が強まれば強まるほど、それだけいっそう夫婦における感情的生活、愛の生活、親密な生活がますます美化されるようになる。³⁵

この記述に従えば、なぜ小家族－核家族を含む－が近代社会の中で合理的に機能したのかが理解されよう。資本主義的な労働が、男性たちの競争を生み、その競争で受けた男性の傷を女性がケアする、そうした役割が女性に与えられたというのがオクスの見解である。家庭が「保護施設」になったとする彼の見解は、やや極端に感じられるが、家族幻想の解体のためには必要な見方であるかもしれない。

このように、オクスは家族が決して一義的なものではなく、本来多義的なものであったことを示している。それは、家族の無規定性と言い換えてもよいだろう。家族とは、歴史的にも、根源的にも、そもそも多様なものであり、多義的なものなのである。ゆえに、今日の家族の危機は、決して悲観的なものではなく、新たに家族を捉え直す契機となるのである。ドイツ語圏の家庭論は、こうした家族概念の組み換えがその前提となっている。家族の自明性を括弧し、改めて家族とは何かを問う時、そこに見えてくるのは、新たな再婚家庭像である「パッチワークファミリー」という考え方である。離婚の肯定と家族の否定から生まれてきたこの概念について、次節で詳しく述べていこうと思う。

4 パッチワークファミリーの概念とドイツ語圏における使用の問題

第一節において、現代ドイツのポップスの歌詞を手

30 Ebd.

31 Ebd.

32 Ebd.S49

33 Ebd.

34 Ebd.S50

35 Ebd.

がかりに、ドイツ語圏の離婚児の特徴を示し、ドイツ語圏における子どもの離婚による負担について述べた。又、第二章では、家族の再構成という視点から、離婚問題や結婚問題を、ドイツの家族論の文脈の中で論じ、オクスの考察を手がかりにして、家族概念の無規定性について示した。

本節では、まず日本の論者が「再婚家庭」や「再婚家庭の子ども」をどのように捉えているのかを概観し、日本の再婚家庭論について触れる。そして、ドイツ語圏でのみ話題となっており、「新たな家庭像」の一つの有力なパターンとして認知されつつある「パッチワークファミリー」の概念を示し、ドイツ語圏の家庭論者たちが何を求めているのかを探っていきたい。

日本における再婚家庭論の中で、再婚家庭の子どもにまで踏み込んで論じているのが、村本・窪田(2004)である。村本らは、再婚家庭について比較的肯定的に論じているが、そこに「ステップファミリー」や「パッチワークファミリー」の文字はない。とりわけ再婚家庭を肯定的に捉えようとする後者の考え方が反映されているとは言えず、ためらいがちに論を進めていく。

離婚後、新しいパートナーと巡り会い、再婚を考える時がくるかもしれませんが、もう結婚はこりごりだと思える人もいますが、なかには離婚後の寂しさや不安に耐えられなかったり、経済的な不安定さを解消したり、もしくは子どものためにと、再婚を急ぐ人もいます。しかし再婚後、再び離婚する人も少なくありません。とくに離婚後、前の結婚生活に対する気持ちを整理できず、ひきずったまま、寂しさや悲しみ、不安から逃れるために再婚した場合は、問題が生じやすくなります。³⁶

この引用分を自然に読めば、そのまま何の違和感もなく理解できる内容であるが、ドイツ語圏の離婚に関する文献と比較すると、この記述がどれほど消極的な視点を含んでいるのかが分かる。「離婚後の寂しさや不安」、「経済的な不安定さ」、「再び離婚」、「前の結婚に対する気持ちを整理のできなさ」、「寂しさや悲しみ、不安から逃れるための再婚」など、否定的、消極的な言葉がずらりと並んでいる。問題があつて、離婚に踏み切っているにもかかわらず、さらに追い打ちをかけるよ

うに、再婚しても「問題が生じやすい」と言うことにはそれこそ問題があるのではないだろうか。

日本には「ステップファミリー」という言葉は使用されていても、「パッチワークファミリー」という言葉はほとんど使用されていない。このことを踏まえ、村本・窪田の子連れ同士の再婚に対する見解を見ておこう。「再婚相手に子どもがいない場合」の記述の次に、「再婚相手に子どもがいる場合」という節の一文である。

相手も子どもを連れている場合は、ますます関係は複雑です。…[中略]…食事の仕方、テレビの見方、片づけ、お手伝い、休日の過ごし方にいたるまで、当たり前のように過ごしていた日常の細々とした習慣が、相手の家族では異なるのです。これは双方にとって大きなストレスとなります。ほんのささいな習慣の違いにストレスを感じることでしょうが、できるだけ話し合い、双方が折り合っていく必要があります。…[中略]…相手の子どもがかわいく思えないこともあるでしょう。早く仲良くなりたいと焦るあまり、相手の子どもがなかなかついてきてほしいことを腹立たしく思ったり、憎いと思うかもしれません。そんな自分を冷たい人間だ、どうして優しくなれないのかと責めてしまうかもしれません。再婚した多くの人が、このような思いを抱いています。…[中略]…楽しい時間や体験を共有する中で、少しでもかわいいと思える時が増えるといいなというぐらいの気持ちで、ゆったりと構えていられると良いですね。ただし、子どもたちの扱いはできるだけ平等にしましょう。差別的な扱いは、再婚相手の子どもを傷つけますし、自分の子どもにとってもよい体験になりません。³⁷

この一文になると、さらに再婚が難しいものだという消極的な表現が登場している。家族内の関係が複雑になるのは当然だが、「大きなストレス」、「相手の子どもがかわいくと思えない」、「腹立たしい」、「憎い」、「冷たい人間」、「自責」、「少しでも増える」等々、子連れの再婚家庭をこのように規定する日本の論者は、再婚家庭を肯定的に捉えようとするドイツ語圏の論者とはあまりにも違い過ぎる。当然、村本・窪田も、再婚家庭の可能性を認めていないわけではない。「再婚家庭に赤

36 村本郁子・窪田容子、離婚と子育て、2004、三学出版、p.74

37 Ebd.,pp.79-80

ちゃんができると、赤ちゃんを中心に家族の絆が強まる」、そして、「再婚家庭が安定してくると、子どもにとっては、実父母ばかりでなく、継父母、義きょうだい、その親戚など、たくさんの人にかこまれ、大切にされて育つという、再婚家庭ならではの得難い体験ができる」³⁸、と、再婚家庭の肯定的な側面をきちんと述べているのである。それにもかかわらず、こうした論者でさえも、再婚家庭を積極的に、肯定的に描けないのはなぜなのか。その原因の一つに、再婚家庭を積極的、肯定的に描くための概念が不在である、ということがあるのではないだろうか。

まさにこの再婚家庭に積極的、肯定的な方向性を与えようとしているのが、「パッチワークファミリー (Patchwork family)」という言葉である。パッチワークファミリーは、子連れ親同士ないしはどちらか一方が子連れ再婚家庭を意味する概念で、新たな家族形態を示す概念として広まりつつある。また、脱近代的な「家族後の家族 (Familie nach Familie)」³⁹としても注目されている。

このパッチワークファミリーは、周知のとおり、英語であるのだが、主にドイツ語圏でのみ使用される言葉であり、「独製英語」なのである。Urban Dictionaryでは、Patchwork familyは、“A new family made up from the remnants of divorced families. Similar to the definition of a patchwork car. This term is used (in English) in German speaking countries.”⁴⁰とされている。つまり、このパッチワークファミリーは、ドイツ語圏で使われる英語だ、ということになる。しかも、興味深いことに、先述したオクスは次のように述べているのだ。すなわち、「ドイツでは、パッチワークファミリーは(まだ)アメリカ合衆国ほどに広まっていない。アメリカでは、このパッチワークファミリーが既に非常によくある家族形態となっている」⁴¹、と。つまり、英語圏ではパッチワークファミリーはドイツ語圏の英語だと言われ、ドイツ語圏ではアメリカの方がドイツよりもパッチワークファミリーが広がっていると言わ

れているのだ。ただし、オクスが言わんとしているのは、英語圏で言うところのstep familyがドイツよりもアメリカで広がっている、ということであろう。ここで重要なことは、数的にはアメリカの方が一般的な再婚義理家庭 (step family) ではあるが、質的には再婚義理家庭よりもパッチワークファミリーの方が豊かな概念である、ということだ⁴²。step familyの概念が大人中心の概念であるのに対して、Patchwork Familyは、子ども中心の概念である、と言ってもよいかもしれない。離婚児研究が盛んなドイツ語圏だからこそ、生まれてきた概念と言えなくもないのだ。例えば、ドイツ語のScheidungskindという概念は、離婚家庭の子どものみを想定しているのではなく、もともと再婚家庭の子どもも想定しているのである。ドイツ語圏では、離婚問題は、ほとんどの場合、再婚問題と関連づけて論じられていると考えてよいだろう⁴³。前節でも述べたが、ドイツ語圏の家庭論の根源には、「結婚の否定」と「離婚の肯定」があるのだ。

例えば、ペトラ・スツァンマー (P.Szammer) の“Antonia, ihre Brüder und der Papa”という絵本は、再婚家庭の子どもの心理的危機を示すと共に、この新たな家族形態の肯定的な側面を明示化する作品となっている。主人公のアントニアは、パパとママと三人で平和に些細な日常生活を過ごしている。パパもママもアントニアの実父母である。が、週末だけ、二人のお兄ちゃんが家にやってくる。アントニアは、その二人が自分の兄であることは分かっているが、そのお兄ちゃんたちがパパとママの元妻との間の子どもであることは分かっていない。また、なぜお兄ちゃんたちが週末にしか家に来ないのか、普段どこに住んでいるのかもまったく分かっていない。そんな二人の兄はアントニアのママのことを良く思っていない。もちろんママはそのことをよく分かっている。がゆえに、われわれからすれば「相手の子どもがなかなかついてきてほしいことを腹立たしく思ったり、憎いと思う」はずなのだが、当のママはかなりあっけらかんとしている—この

38 Ebd.,pp.83

38 cf. Helmut Mader Stiftung,2008

40 引用元: <http://www.urbandictionary.com/define.php?term=patchwork%20family>

41 M.Ochs, Ebd.,S.79

42 この点については、拙論文「パッチワークファミリーとその子どもたち」、2009、人文科学第十四号、大東文化大学人文科学研究所において既に論じている。

43 オクスも、夫婦関係、離婚、再婚、パッチワークファミリーを全体的連関の中で捉えようとしていた。

点に欧米人の自由さが描かれている。アントニアも、二人の兄がママのことを避けていることもなんとなく感じ取っている。そんなふうにして、物語が展開していく。いったいこの二人のお兄ちゃんはいったい誰なのだろう、どこに住んでいるのだろう、というパッチワークファミリーでしかありえないような疑問に答えるのが、この絵本の主題であった。絵本の最後には、二人のお兄ちゃんのママ（アントニアの義母）と彼女のパートナーまで登場し、複雑な人間関係の中で、楽しくたくましく生きる子どもたちの姿が描かれる。パッチワークファミリーという概念をもたないわれわれには、やや理解するのが難しい話の内容であるが、こうした絵本がドイツ語圏において出版されていることに、ドイツ語圏でのパッチワークファミリーの根強さが示されている。

たしかに、我が国でも離婚家庭の子どもを描く絵本は出版されつつある。明石書店から出版された『パパとママが別れたとき……』という三巻シリーズや太郎次郎社エディタスの『ステップキンと7つの家族』や『ココ、きみのせいじゃない』は、離婚児の心理を描く文献である。彼らの存在を知らしめるためにも、そして彼らの心情を理解するためにも、こうした文献は重要であろう。だが、こうした一連の文献を除けば、親の離婚と子どもの心理について専門的に扱った一とりわけ日本人による一書物はほとんどない。離婚児の心理については、未だにその重要性さえ十分に承認されていないと言ってもよいかもしい。概念が不在であるがゆえに、離婚児のケアの重要性が承認されないのか。それとも、彼らへの関心や問題意識が低いがゆえに、離婚や再婚に関わる概念が生じないのか。難しい問題である。

5 おわりに

本論文は、「ドイツ語圏」にこだわりがある。「ドイツ」、「オーストリア」、「スイス」と表記してもよかったのだが、この三カ国に実際に何度も行き、離婚問題に触れるにつれ、私は一つの大きなうねりを感じずにはいられなかった。ドイツ語圏特有の離婚への寛容さというか、オープンさがこの三カ国にはあるのだ。極端なことを言えば、「離婚って素晴らしいよ」と聞こえてきそうなほどに、積極的なのだ。そこには、「不完全な人間への寛容さ」という欧州の思想が見え隠れしなくもない。いずれにしても、ドイツ語圏には離婚に対する独

特な寛容の文化がありそうなのである。

本論では、主にドイツ語圏における離婚や再婚をめぐる周辺的な議論を互いにつけ合わせてみた。第一節では、ドイツ語のポップスの詩の解釈を通じて、ドイツ語圏の離婚児の心理の固有性を明らかにした。彼らに共感する必要はない。理解することが大切なのだ。この説明を通じて、ドイツ語圏の離婚児たちが日本の離婚児とは全く違う離婚の捉え方をしていることが示されたと思う。彼らの離婚へのオープンさも示された。第二節では、ドイツ語圏の家族研究・離婚研究への私自身の違和感を探る節となった。なぜドイツ語圏の家族論や離婚研究は、こうまでして家族に対して批判的であるのか、なぜ離婚にここまで肯定的なのか、とかつてより疑問に思っていた。当然、両親の離婚は子どもたちに深刻なダメージを与える。それはドイツ語圏においてもきちんと理解されていた。にもかかわらず、なぜ彼らは従来の小家族を幻想と見なし、新たな家庭像を求めめるのか。このことを探る節となった。第三節では、パッチワークファミリーの定義の問題ではなく、パッチワークファミリーという言葉の有無がどのような差異を生むのか、ということ明らかにしたつもりである。日本人の描く再婚家庭とドイツ語圏の人々が描くパッチワークファミリーのあいだのズレと言っているかもしれない。この個々に独立しそうな三つのテーマをにつけ合わせることで、ドイツ語圏の家族研究・離婚研究の背景というか、思想というか、根幹のようなものがうっすらと見えてきたように思う。今後、日本でどこまでこうした研究が広まるのかは全く分からないが、これからも探求し続けたい問題である。